

アレント「活動」論における「複数性」の客観性

間庭 大祐（立命館大学大学院・博士前期課程）

アレントにおいて「活動」とは、「政治」のあるべき姿そのものである。その行為は「言論」を通じたコミュニケーションとしてなされ、行為者のアイデンティティを暴露する対人型の行為である。したがってそれは「世界」を構成する人間が一人ではなく多数の人間であるという多数性に対応しており、この多数性あるいは「複数性」が基本的な条件となる。いわば「複数性」とは人間存在の客観性を端的にあらわしたものである。

しかし、彼女の「政治」像はさまざまな読み方がなされる。その多様な解釈とは、「共和主義」的な解釈や「一種の規範志向・コンセンサス志向」な読み方、あるいは彼女の実存主義的な側面に注目し、その「差異」という親和性から脱構築・ポストモダンといった解釈などである。このような思想解釈の多様性の背景には、彼女自身の思想の独創性もさることながら、この「活動」論とりわけその行為の基本的条件となる「複数性」をめぐる、ある難点が存在することが考えられる。その難点とは、人間の差異を端的にあらわす「臆見」の相互の披瀝は、際限のない「臆見」の対立に陥り、何らかの共同体を解体してしまうのではないか、というアポリアである。この問題が本報告での中心的な論点のひとつである。

この難点に対して、アレントは「友情における平等化」という原理によって答えようとする。この「友情」という概念は感情的な精神交流や共感といったものではない。それは「対話」という行為に「内在的傾向性」として内包される、いわば「世界」共有の客観性によって支えられるものである。

本報告は、アレントの「活動」論における「複数性」そのパースペクティブを、「世界」共有のリアリティとして位置づけ、彼女のアポリアに答えようとする試みである。そのためにまずは、アレントの思想は全体主義のアンチテーゼとして打ち出された、という視点を軸として、彼女が「複数性」概念を掲げるまでにいたった思想的営為、とりわけ全体主義把握を考察し、そのアンチテーゼとしての「複数性」のもつ意義を確認し、その客観性を明らかにする。そのうえで、人間存在の客観性を保持しつつ、他者との共生に対して、「友情」という客観的なリアリティでもって答えようとしたことを明らかにする。本報告は、アレントにつきまとう上記のアポリアの克服にむけた試みのひとつであり、それは「個」か「共同体」か、といった二項対立的な考え方の克服の方途を探るものでもある。